2012年　9月30日　第20号

つたのは通信

特定非営利活動法人　としま遺跡調査会

甦る　玩具たち

―小さなモノから広がる子どもの世界―

区内遺跡から出土した様々な土製玩具

終了致しました

豊島区の文化財展 2012

―江戸の玩具と子どもの世界―

会期：2012年10月29日（月）～11月9日（金）
午前9時～午後5時（土・日・祝日除く）
会場：豊島区役所本庁舎1階ロビー（最寄 JR池袋駅）
※展示会場にてパンフレットを無料配布いたします

文化財ウィークに合わせて、10月29日から11月9日まで、豊島区役所1階ロビーにて豊島区教育委員会主催「豊島区の文化財展2012」を開催します。今回は、豊島区内の江戸時代の遺跡から出土した「玩具」に焦点を当て、当時流行した遊びや、玩具に込められた子どもに対する人々の願いについて紹介します。

江戸時代は、子どものための玩具が大量に生産されるようになり、豊かな遊びの文化が花開いた時代です。豊島区内の江戸時代の遺跡（大名屋敷・町屋・村落）からは、ままごと道具や土人形など、さまざまな土製の玩具が出土しています。素焼きである土製の玩具はとても安価だったため、身分に関係なく子どもたちの間で広く親しまれていました。また、玩具は単なる遊

び道具ではなく、病気災難除けなど、子どもに対するさまざまな願いが込められていました。当時は子どもの生活環境が現代よりも厳しかったこともあり、こうした信仰は、子どもの無事の成長を祈る大人の願いの表れであったといえるでしょう。

小さな小さな玩具から、江戸時代に生きた子どもの大きな世界を覗いていただければと思います。楽しみにお待ちください。（中山なな）

土人形復元中。ぜひ展示会場で精巧な仕上がりをご覧下さい。

終了致しました ”Let's Try 考古学”で江戸のおもちゃを作ろう！

11月3日（土）に、区内在住・在学の小学校5年生～中学生（小学生は保護者同伴）を対象とした、豊島区教育委員会主催“Let's Try 考古学”を開催いたします。今年は上の記事でもご紹介いたしましたように、埋蔵文化財展示のテーマが区内遺跡から出土した江戸時代の玩具ということで、その関連イベントといたしまして土製玩具の製作、さらには玩具を使った遊びに挑戦していただく内容を予定しております。なお、”Let's Try 考古学”の詳細につきましては「**広報としま 10月11日号**」に掲載されますので、そちらをご覧下さい。

とします未来文化財団 文化カレッジ

前期の遺跡講座が終了しました

天候に恵まれ最高の巡検日和でした

9月22日、遺跡講座の第4回が開かれました。昨年度に行われた、谷田川右岸に広がる弥生町遺跡や駒込一丁目遺跡などの遺跡めぐりは好評でした。前回に続いて、今回は「としま地域の遺跡を歩く－区外の遺跡から見た豊島区の遺跡－」と題して、対岸の西日暮里の道灌（どうかん）山から王子の飛鳥山まで、主に原始・古代の遺跡を見るコースを歩いてきました。

受講生の皆さんは、特に荒川側の崖や谷田川の緩斜面などの自然地形と原始・古代の遺跡の広がりについて関心が引かれたようで熱心に聞き入っていました。距離にして約4㎞、所要時間は3時間を費やした講義となり、ゴールの飛鳥山に辿り着いた際には疲れとともに達成感に満ちた表情をされていたのが印象的でした。最後には、受講生の皆さんから当会のスタッフにねぎらいの拍手をいただき、前期講座を終えることができました。

今年度は、前期後期に分けて講座を行っております。前期は旧石器時代から中世までの内容で講義してきました。後期は、これに引き続いて主に江戸時代に焦点を当てた講座となっております。今後も、豊島区内の遺跡発掘調査の成果や歴史を分かりやすくご紹介する講座を企画していきたいと思っております。賛助会員の皆様には引き続きご賛同とご協力を賜れればと存じます。（山﨑吉弘）

王子飛鳥山にて。古墳を目の前にしての講義。

発掘調査報告書の新刊紹介

学習院大学周辺遺跡で１冊（『学習院Ｉ』）、染井遺跡で２冊（『染井Ｘ』、『染井ＸⅢ』）、巣鴨遺跡で１冊（『巣鴨Ⅳ』）、旧感応寺境内遺跡で１冊（『旧感応寺Ｉ』）が新たに刊行されました。今回は紹介できませんでしたが、旧感応寺境内遺跡の調査成果を収めた『旧感応寺Ｉ』（豊島区教育委員会発行）では、感応寺期以前に居を構えていた安藤家下屋敷期に比定される遺構群が確認されました。『染井Ｘ』（豊島区遺跡調査会発行）は、津藩藤堂家染井屋敷地内の発掘調査の成果です。当地では、植栽空間の中にたたずむ掘立柱構造の建物址が１棟発見され、庭空間での土地利用の一端が判明し、染井屋敷史に新たなピースが加えられました。

＜豊島区遺跡調査会発行＞

『巣鴨Ⅳ』　豊島区遺跡調査会調査報告 14　巣鴨遺跡（イリュウ巣鴨ビル地区）の発掘調査

本地区は、巣鴨駅北口ロータリーにほど近い場所に位置します。現在の巣鴨駅周辺は、江戸時代には多くの大名屋敷や旗本の屋敷が並ぶ武家地でした。本地区も江戸時代の初め頃より信濃松本藩水野家の屋敷の一部として利用され、その後も江戸時代を通じて様々な大名家や旗本の屋敷となっていたことが文献や絵図などの記録から分かっています。

発掘調査では土地の所有者と関連する遺物や遺構は検出されませんでしたが、江戸時代に耕作された畝痕が発見されていることから、屋敷の中で畑作を行っていたようです。武家屋敷の中の土地をどのように使っていたのかを考える手掛かりとなる貴重な資料と言えるでしょう。　（山田琴子）

＜豊島区遺跡調査会発行＞

『染井ＸⅢ』豊島区遺跡調査会調査報告 27 染井遺跡 (レジデンスジェイティ地区・Brillia 駒込染井地区) の発掘調査

本書は、1992 年の発掘調査と、のち 2006 年に同一地所で行われた再調査の成果を併せ合本とした報告書です。書名の 13 という若い番号を冠しているのは、このためです。

この 1992 年の発掘調査以来 20 年間、染井遺跡では数多くの発掘調査がなされ、とりわけ本書で扱っている江戸時代の大名屋敷「藤堂家染井屋敷」に関しては、それまで知られなかった様々な事実が明らかとなってきました。現在までの考古学・文献調査の結果、最盛期で約 10 万坪に及ぶ広大な屋敷範囲では、屋敷地内を縦横に区画する堀や柵、それらの各区画に展開する屋敷（御殿）・長屋・倉庫群、そして庭園等といった、実に多様な土地利用がなされていたようです。もっとも、これまで発掘調査が行われたのは屋敷地全体のおよそ 15％程度に過ぎず、全体像を捉えるには未だ程遠い状況と言えるでしょう。本書では従来の成果をごく簡単ながらまとめています。また、考察編では「サカイ泉州麿生御塩所」銘を有する焼塩壷の相対編年試案を提示しています。ご一読いただけたら幸いです。　（宮川和也）

当地の発掘調査風景

＜としま遺跡調査会発行＞

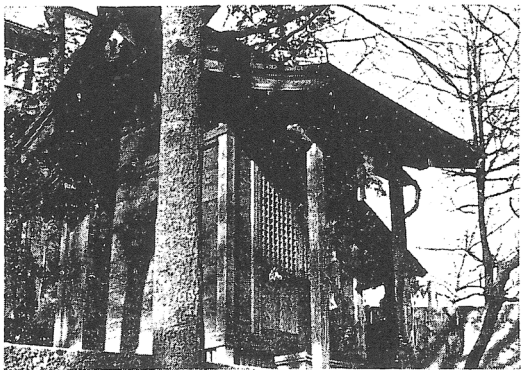
『学習院Ｉ』　としま遺跡調査会報告４　学習院大学周辺遺跡（自然科学研究棟地区）の発掘調査

学習院大学の校舎建築工事に先立ち、2008 年に実施した発掘調査の報告書です。学習院大学周辺遺跡は明治 38 年に土器が採取されたことで存在が知られるようになりましたが、その実情は長く不明でした。今回の調査で、後期旧石器時代の文化層が３つの段階にわたって存在することが明らかになりました。特に、立川ロームⅨ層という古い地層から局部磨製石斧が出土したことや、それよりやや新しい地層から大型の用途不明の石器が出土したことが注目されます。　（成田涼子）

出土した局部磨製石斧（左：表、右：裏）

シリーズ　としまの遺跡 番外編

金山稲荷と横穴



←昭和三〇年頃の金山稲荷

金山稲荷は、遺跡指定地外に位置し雑司が谷一丁目３番 37 号付近の、弦巻川（現在は暗渠）を見下ろす台地の縁辺部に立地しています。対岸には本浄寺や清土鬼子母神が所在します。

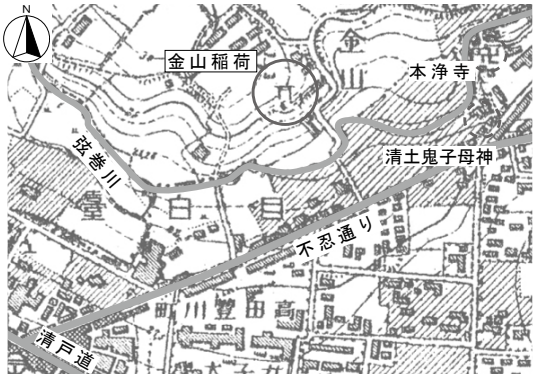
当地には、昔（元亀年間か）刀鍛冶が住んでおり、その守護神が金山稲荷（鉄（かな）くそ稲荷）だといいます。『新編武蔵風土記稿』には「この社の西の方なる崖元文の頃崩れしに大いなる横穴あり。穴中二段となり上の段に骸及ひ国光の短刀あり。（中略）下段には骸のみありしと云」とあります。これについては江戸後期の地誌『雑司が谷の諺（ことわざ）』はより詳しく記録しています。「本浄寺より壱丁余西に森畑中にあり、金山稲荷と云石堂孫左衛門と云鍛冶の住し処也とて今に鉄くそ出ル。此稲荷に並ふ土手あり、今ハ多畑と成ハ此土手を切落とせし時穴あり。其内に段ありと上ニハ臥たる形にて骸骨あり。下ニ二人すハリ居る形にて骸骨其儘ありしか、段の上ニ脇差一腰有しを持来りて今名主平五郎持伝てさしける也。又其後近来ニ成、穴壱ツ出来、其内にも死骸あり、衣なとのくされたる形まてにて有し也。」（『豊島区史資料編三』）

元文の頃（1736 ～ 41）、社の近くで謎の横穴が出現し、その中は上下二段の構造で、上に一人、下に二人分の遺骸があったというのです。これだけだと古墳時代の横穴墓が開口したと考えられます。しかし、上段の遺骸には国光作の短刀が伴い、下段の二人が座位という状況は主人と従者の姿にも見え、中世以降の遺骸とみるのが妥当でしょう。身分ある人物が埋葬されたのでしょうか。

ともあれ、横穴の具体的構造は不明確ながら穴が出現したのは空洞だったからに他なりません。その数年後（数年前とも）にまた一つの穴が出現しており、複数の分布が認められます。これらは中世の「やぐら」のあり方に似ています。上記以外の文献には、社近辺から鉄くそ（スラグ）がよく出土するとあります。文献資料の記述が確かならば、中世及び石堂氏に関わる遺跡が広がっているものと指摘でき、台地から弦巻川へと下る急峻な斜面地には横穴が群を成しているのかもしれません。

さて、今年４月下旬、金山稲荷に立ち寄ったところ、社が鎮座していた場所は宅地造成によって見るも無残な状況に変貌していました。１年前にはすでに社は取り壊されていて、移転したのかも定かではないとのことです。試しに故地一帯を散策してみましたが、中世遺物や横穴は発見されませんでした。しかし、台地縁辺部にて別の副産物が。縄文前期の土器二点の発見です。この発見により当地一帯に集落が広がる（埋蔵文化財包蔵地の）可能性が高まりました。この小さな破片は、今後雑司が谷地区ひいては豊島区縄文時代研究の上で重要な情報を提供してくれるでしょう。

（高木翼郎）



金山稲荷の位置（明治後期の地図）

【編集後記】

江戸時代の社会における「子ども」に対する考え方、遊びの中での「玩具」の位置づけなど、現代とは異なるものであったのでしょうか。そんなことを考えながら文化財展の準備・仕事に勤しんでいる編者。文化財展が待ち遠しいです。（翼）

編集・発行
特定非営利活動法人
としま遺跡調査会
〒 170 - 0002　東京都豊島区巣鴨３- ８- ９　巣鴨複合施設 201 号室
Tel・Fax　03-3915-6962　　E-mail　tics389 @ a.toshima.ne.jp
ホームページアドレス：http://www.toshima-iseki.org/

「つたのは通信」の由来：蔦は大きな樹ではありませんが、生命力が非常に強い植物です。この蔦の葉が周囲の樹木や建物につたい茂るように、多くの人に遺跡の楽しさ、大切さを知ってもらいたいとの願いを込めて会報の名としました。また、染井遺跡を代表する大名屋敷である津藩藤堂家の家紋としても、馴染み深い植物です。

題字：湯澤和子　　ロゴデザイン：石原幸
イラスト：千葉弘美